

公開講座「瀬名っ子しぜん探検隊」実践報告

遠藤知里

キーワード／実践報告、公開講座、キャンプ

Key Words／Teaching Report, Extension Course, Camp

1. はじめに

本学の公開講座（シトラスセミナー）は、地域に開かれた大学としての地域社会との連携の一環として実施されてきた。これまでも教員の専門性を活かしたさまざまな講座が提供され、地域の人々に親しまれている。今年度は、新たな試みとして地域の子どもたちを対象とした公開講座を実施したので、ここに報告する。

2. 公開講座「瀬名っ子しぜん探検隊」について

2.1. 開設目的

本講座は、子どもたちに対する教育効果と、短大生に対する教育効果の両方を意識して開設した。

第一の目的は、子どもの自然体験プログラムを通して、子どもが居住する地域の自然にふれる機会を提供することである。

第二の目的は、本学の保育科および幼児教育等に関心のある学生が指導者としてかかわることにより、学生の体験の幅をひろげ、保育者として必要な資質を高める機会を与えることである。

2.2. プログラムの特徴

本講座のプログラムは、キャンプである。つまり、子どもたちと本学学生がともに生活をし、自然体験をすることが活動の中心となっている。したがって、本講座のプログラムを指す場合、以下「キャンプ」と表記する。

本講座は、短大周辺の自然を活用したキャンプを主なプログラムとし、1回完結とせずに、4回のキャンプに継続参加することを原則として参加者を募集した。

継続参加を原則とした理由は、主に二つある。一つは、春から秋にかけて継続的に実施することによって、季節の変化と自然との関係を感じられることを期待したからである。もう一つは、異なる年齢層からなる同一の仲間との活動を幾度も重ねることによって、学校とは異なる新たな人間関係が深化することを意図したからである。

また、本講座では4回のキャンプのうち2回を、宿泊を伴うものとした。この理由としては、一日の時間的変化と自然との関係（たとえば夕闇や夜明けの薄明、朝晩の温度変化など）を感じ取る機会を提供すると同時に、特に生活を共にすることによって食事作りなどの協働作業の機会を増やし、子どもたち自身が見通しをもって活動することを意図した展開が可能

と考えたからである。

2.3. キャンプの概要

キャンプの概要を、表1（参加者への案内文より抜粋）に示した。

表1「瀬名っ子しぜん探検隊」概要

<p>第1回 5月31日(日) 「仲間作り野外ゲーム」 ～新しい友達を作ろう～</p>	<p>探検隊の仲間と一緒に、ゲームにチャレンジしてみよう！ちょっとやそっとじゃク リヤーできないぞ！できたときには「ヤッター！」、きっと笑顔がいっぱいだよ！</p> <p>9:30 受付開始(短大集合)～10:00 小グループに分かれてピオトープ周辺・短大内で自然を活かしたいろいろなゲームに挑戦(途中でおやつ)～12:00 保護者説明会・参加費集 金(このときに全4回分7000円を集合させていただきます)～12:30 解散</p>
<p>第2回 7月11日(土) 「長尾川で遊ぼう」 ～水辺の生き物がさし～</p>	<p>瀬名を流れる長尾川。水はどこから流れてくるのかな？夏をむかえた長尾川には、 どんな生き物がいるのかな？魚はいるかな・・・？お楽しみに！</p> <p>8:30 受付開始(短大集合)～9:00 小グループに分かれて長尾川に移動 ネイチャーゲ ーム 生き物探し ほか(途中でおやつ)～11:30 短大へ移動 まとめ～12:30 解散 ※川に入ります。濡れてもよい運動靴を持ってきてください。</p>
<p>第3回 8月28日(金)～30日(日) 「瀬名っこキャンプ」 ～竜爪山冒険登山～</p>	<p>瀬名を見守る竜爪山。あの山の向こうには、いったい何があるんだろう・・・探検 隊クライマックスは、熱い冒険登山！夏休みの宿題は、終わらせておいてね♪</p> <p>28日(金)(各自、家で夕食とお風呂を済ませてから)19:00 短大集合～登山説明・登山準 備～21:00 和室で就寝 29日(土) 5:00 起床～7:37 常葉短大入口バス停よりバス乗車～8:30 竜爪山登山開始～ 15:00 キャンプ場着 温泉～17:00 夕食～夜のつどい～21:00 消灯 30日(日) 7:00 起床 朝食 のんびり過ごす(沢遊び・クラフト)～11:30 現地解散</p>
<p>第4回 10月17日(土)～18日(日) 「ふりかえりキャンプ」 ～山頂から日の出を見よう～</p>	<p>探検隊は、これにて解散。でも、瀬名っ子を結ぶころのきずなは永遠です。こ れまでの思い出をふりかえりながら、最後のキャンプを楽しみましょう。</p> <p>17日(土)(各自、家で夕食とお風呂を済ませてから)19:00 短大集合～登山説明・登山準 備～20:00 和室で就寝 18日(日) 3:00 起床～4:30 短大出発・徒歩で梶原山へ～一日の出～梶原山頂で朝食～7:00 下山・短大へ～9:00 解散</p>

募集定員は、瀬名地区および近隣地域に居住するか通学している小学校4年生から6年生の子ども20名とした。しかし、参加者の保護者から「弟や妹の参加を受け入れてほしい」との要望があったため、小学校低学年も受け入れた。

2.4. 参加者について

キャンプに参加した子ども的人数および内訳を表2に示した。

表2「瀬名っ子しぜん探検隊」参加者の内訳

	小1		小2		小3		小4		小5		小6		計
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
第1回					1	2	3	1	1				8
第2回	2		2				2	1	1				8
第3回	1		2		1	2	3	1	1				11
第4回	2		2				2	2	1	1			10

上述の理由により全てのキャンプへの参加を原則としたが、実際に毎回参加した子どもは3名(小4男子2名、小5男子1名)であった。また、参加者が最も多かったのは、第3回の「瀬名っこキャンプ」(11名)であった。

2.5. 指導者（本学学生）について

キャンプに参加した指導者の人数および内訳を表3に示した。

表3 「瀬名っ子しぜん探検隊」指導者（本学学生）の内訳

	保 育 科		英語英文科		専攻科		計
	1 年		2 年		保育専攻		
	男	女	男	女	男	女	
第1回			1	3	1	1	6
第2回		2	2	6	4		14
第3回				2	2	1	5
第4回				5		1	6

指導者は、保育科2年生の「子どもと自然」ゼミの学生、保育科の2年生が中心となって活動している学生サークル「野外であそぶ研究会」の学生、英語英文科1年の子ども英語コースの学生が中心となって活動している学生サークル「アウトドア研究会」の学生から、希望者を募った。女子学生が多数を占める本学において、指導者はどうしても女子の割合が多くなりがちである。しかし、男子参加者の行動のモデルとなるような男性指導者がある程度の人数必要である。そこで、専攻科（保育専攻）の男子学生を中心に声をかけ、指導を依頼した。

本来、安全管理や子どもとの関係の観点から、指導者はプログラムのすべてに関与することが望ましい。しかし、公開講座の開講日に補講が入る場合があり、補講に出席するために公開講座には部分的にしか参加できないという学生が多数いた。そこで、今回は本人の参加意欲を尊重して、部分参加を全面的に認めることにした。特に第2回のキャンプは補講と重なったためにプログラム途中で学生の入れ替わりが多く、それが指導者の数に反映されている。

また、「子どもと自然」ゼミの学生および「野外であそぶ研究会」の学生のうちキャンプの指導にあたる学生については、学生の写真とメッセージを載せた手作りの冊子を作成し、保護者説明会で配布した。冊子の作成は「子どもと自然」ゼミの学生が担当した。今回は参加者よりもスタッフ希望者の数のほうが多く、しかもキャンプ毎に入れ替わりがあるため、このような冊子があれば保護者も子どももスタッフの顔と名前を覚えやすく、安定した人間関係形成の一助になるものと考えて、このような冊子を準備した。

2.6. 安全管理上の配慮

事故を未然に防ぐためには、子ども自身が自分の身の安全を守ることが第一であるが、主催者側が十分に安全上の配慮をしておくことが不可欠である。さらに、保護者や指導スタッフに対し、十分な協力を求めることが重要である。

まず、保護者に協力を求めたことは、次の2点である。初回のキャンプ時に保護者説明会を実施し、プログラムの内容を十分に理解していただいた。また、保護者には参加者の健康状態や配慮事項について確認するための生活調査票（図1）を配布し、記入と提出にご協力いただいた。個人情報保護の観点から、生活調査票の管理には十分な配慮をしている。なお、

健康面以外では、日常生活の様子として、「好きなテレビ番組」、「好きな歌」、「好きな食べ物」、「きらいな食べ物」、「好きなこと」、「苦手なこと」、「得意なこと・うまくできること」、「その他スタッフに伝えてほしいこと」と項目を分けて記入できる欄を設けた。また、参加動機について「子どもの参加動機」、「親の参加動機」を記入する欄を設けた。これらの情報は、子どもとスタッフが共通の話題を持ったり、事前にそれぞれの子どもの得意なことや苦手なことを知り、必要な配慮事項を考えたりするのに役立っている。

瀬名っこしぜん探検隊 キャンパー生活調査票			
キャンパーの氏名	(ふりがな)	男・女	顔がよくわかる 写真を貼って ください (サイズは自由) (スナップ写真可)
住所	〒 TEL: - -		
学校名・学年	小学校 年		
生年月日	年 月 日 生	保護者氏名	(お父さま)
緊急連絡先	TEL: - - (どちらですか?) 保護者携帯: - - (父・母)		(お母さま)
健康について	アレルギー	ない・ある (具体的に)	
	乗り物酔い	ない・酔いやすい (対処法があれば)	
	目の異常	ない・ある (具体的に)	
	耳の異常	ない・ある (具体的に)	
	その他配慮が必要なこと		
	【好きな番組】	【好きな食べ物】	【好きなこと】

図1 生活調査票(部分)

さらに、指導に当たる学生に対して協力を求めたことは、できるだけ早く子どもの名前を覚えることであった。キャンプ前に参加者の生活調査票に目を通し、事前にできる限り参加者の顔と名前を一致させておくことの重要性を伝えた。また、参加者および指導者が名札を身につけることにより、名前呼び合うことによって安心感のある人間関係が早期に形成されるようにした。また、プログラム前後にはミーティングを行い、指導法や安全管理について確認した。

このキャンプでは、今のところ大きな事故は起こっていない。しかし、準備の段階では、事故は起こるものと想定しておいたほうがよい。事故が起こった場合の備えとして、参加者と指導者全員が傷害保険(日帰りの場合はレクリエーション傷害保険、宿泊を伴う場合は国内旅行傷害保険)に加入している。また、学生については指導時の事故(相手に怪我をさせたしまった、相手の物を壊した、など)を補償する賠償責任保険に加入している。

3. キャンプの内容

3.1. 第1回「仲間作り野外ゲーム～新しい友だちを作ろう～」

第1回のキャンプは、5月末に実施した。全4回のキャンプの導入的な位置づけであり、参加者間および指導者と参加者間の距離を縮めることを目的として、短大の中庭でグループワークを行った。

参加者が8名と少数であったため、その8名全員をひとつのグループとして、仲間づくりと自然に親しむことを目的とした「日本列島」、「くものす」、「目隠しトレイル」、「カモフラージュ」の4つのゲームに取り組んだ。

「日本列島」、「くものす」は、A.S.E.およびグループイニシアティブと称されるアクティビティである。「日本列島」は、人数に応じた大きさの台を準備し、「この台の上にグループの仲間全員が乗り、10秒間数えてみよう（または、一曲歌ってみよう）」という課題を示す。台の大きさは、達成可能なように設定するが、参加者にとっては誰もが小さすぎると感じる大きさである。また、「くものす」は、二本の柱（樹木など）の間にロープで作った「くものす」を準備し、「グループの仲間全員で、くものすのこちら側から向こう側に通り抜けてみよう。ただし、同じ箇所を2回使うことはできない。また、ロープに身体が触れたら最初からやり直し。」という課題を示す。くものすは、最下部のロープが参加者のひざ下程度の高さ、最上部のロープが頭くらいの高さとなるようにし、一人でも通り抜けられる箇所と、人に持ち上げてもらったり支えてもらったりしなければ通り抜けられない箇所の両方が含まれるように作る。このように、一見した印象では非常に困難と感じるような課題に対して、6名から10名程度の小グループで取り組み、試行錯誤しつつ達成をめざすものである。



「日本列島」



「くものす」

「カモフラージュ」は、ネイチャーゲームの一種であり、自然環境（今回は中庭のビオトープ）の一定区間の中に十数個の人工物（ミニチュア人形や小さな日用品など）を置き、目で見ること（視覚）のみを使ってそれらのものを探し出すアクティビティである。また、「目隠しトレイル」は、ネイチャーゲームと同種のものであり、自然環境の中に手が届く範囲の高さでロープを張り、目隠しをしてそれをたどっていくアクティビティである。触覚や嗅覚などで感じ取ってほしいものがある場所には、その箇所のロープに目印（たとえば布を結ぶ

など)をつけておく。その目印に触れたら、その周辺の自然をていねいに感じとってみるように、参加者にはあらかじめ伝えておく。



「目隠しトレイル」



「カモフラージュ」

今回は8名の子どもが参加したが、男女比が3対5であった。小学校中学年から高学年の子どもたちは、男女一緒に行う活動に抵抗を感じる場合がよくある。しかし今回の場合は、指導者として女子学生のほか男子学生も2名参加したために、子どもに対して男女両方のスタッフでかかわることができた。そのため、自然な形で男女間の壁を下げることができたようであり、アイスブレイクとしての目的を十分に達成することができた。

また、今回はプログラム終了後に保護者説明会を実施し、キャンプ全体の目的や計画を説明した。このとき、小学校低学年の弟や妹も可能な範囲で参加させてほしいとの要望があり、次回から受け入れることとなった。

学生の感想としては、「(保育実習や教育実習では、対象がほぼ幼児であるため)小学生と接する経験が少ないが、小学生と活動することによって、たとえば女子のほうが大人びているなどの特有の雰囲気を知ることができた。自分の小学生時代をふりかえり、自分たちもそうだったのかなと思った。」などの声があった。

3.2. 第2回「長尾川で遊ぼう～水辺の生き物さがし～」

第2回のキャンプは、7月中旬に実施した。瀬名地域を流れる長尾川に親しみ、その水源である竜爪山(第3回キャンプで登山を実施)に意識を向けることを目的とした。長尾川は、短大周辺では季節によっては水が枯れてしまう。しかし、梅雨の季節であれば、短大周辺でも十分な水があるために、絶好の機会と捉えた。また、短大周辺では人工的な印象が強い長尾川であるが、水梨橋より上流に行くともヨシが茂り、水質もよく、風景も一変する。瀬名地区に住む参加者にとっては見慣れた風景かも知れないが、指導にあたる学生にとっては、その違いは新鮮であったようだ。

今回は、前回のようにゲームなどの決まった活動をするわけでもなく、学生スタッフと共に川に出かけ、川で遊んでくるという非常に自由度の高いプログラムであった。この日は、保育科2年生は補講日であったが、子どもたちは学生スタッフに会うのを楽しみにしている

ので顔を出してほしいと伝えたところ、補講の合間を縫って多くの学生が参加し、子どもたちにかかわってくれた。少しの時間でも一緒に遊んでくれる学生に対して、前回参加した子どもは喜びの表情を見せていた。スタッフの出入りが多いことによって集団が落ち着かず、なんらかの影響が出るものと予想していたが、英語英文科子ども英語コースの1年生（アウトドア研究会学生）4名が積極的に子どもたちにかかわり、準備から後片付けまで全面的に協力してくれたため、プログラムは円滑に進行した。彼女たちの子どもたちへの接し方はあたたかな心が感じられるものであり、そのため子どもたちは安心感を持って川遊びを楽しむことができたものと思われる。

長尾川の生き物としては、オタマジャクシ、ハヤ、ドジョウ、アメンボなどを見ることができた。家に持ち帰って観察したいという子どもには、飼ってみるのも良いし、飼わないのであれば長尾川に放すことを約束して、持ち帰りを認めた。長尾川がより身近に感じられ、ふたたび足を運ぶきっかけになると思われたからである。参加者が近くに住んでいることによって、このようなことも可能になる。地域で行うプログラムの利点のひとつである。

学生の感想としては、「子どもたちの生き生きとした様子に驚いた」などがあり、「初めての経験で楽しかった」という者もいた。特に今回は学生の数が多く、指導体験もさることながら、学生自身の体験としても有意義であったようだ。



「長尾川での魚取り」



「自然なかかわり」

3.3. 第3回「瀬名っこキャンプ～竜爪山冒険登山～」

第3回のキャンプは、8月末に実施した。竜爪山は瀬名の北部に位置し、地域の人々に親しまれている山である。当初は、瀬名から竜爪山を越えて黒川に下りる登山コースを用い、清水森林公園黒川キャンプ場でテント泊をするキャンプを計画していた。具体的には、登りは長尾川の源流の一つである則沢に沿った登山道を用い、下りは東海自然歩道を用いるコースであった。しかし、小学校低学年の子どもにはこのコースでの登山は困難と思われた。そこで、登山をしないで公共交通機関（バス）を乗り継いで移動し、途中で食料等の買い出しをしながら黒川キャンプ場に入るコースを新たに設定した。これらの2つのコースから、子ども自身が体力や自分の意思を考慮して、自分に合ったものを選ぶようにした。登山コースを「登山隊」、バスで移動し途中で買い出しをするコースを「キャンプ隊」と名づけ、子ども本

人の意思でどちらに参加するかを決定するようにした。出発前夜まで迷っていた子どももいたが、最終的には登山隊に5名、キャンプ隊に6名の子どもが参加した。



「和室での前泊」



「中庭での朝食」

キャンプ隊、登山隊ともに、1日目の19時に短大（和室）に集合した。集合前に夕食と入浴を済ませておくように、各家庭にあらかじめ依頼しておいた。集合後、キャンプ全体の説明の後、装備や行動食をひとりひとりに配布し、パッキングを行った。共同の装備や大きな荷物はまとめて車で運搬することを子どもたちに伝え、必要最小限の荷物（雨具、弁当、行動食、水筒、タオルなど）のみを選んでディバッグに自分自身で詰めるように促した。その後、シュラフを用いて和室で就寝とした。消灯後、学生が手分けして弁当（おにぎり）を作り、翌日に備えた。

2日目は、5時に起床し持ち物を整理したあとで、中庭で朝食（オープンサンド）をとった。その後、弁当を配布し、水筒を準備して、登山隊は7時過ぎに、キャンプ隊は8時過ぎに短大を出発した。



「出発（登山隊）」



「出発（キャンプ隊）」

キャンプ隊は、保育科2年生の学生2名が行動を共にして、子どもたちの主体性を大切にしつつ、必要なサポートを行った。瀬名川東バス停からバスに乗り、清水駅で乗り換え、その後途中下車してスーパーマーケットに立ち寄り、食材の買い出しをした。買い物では、前日に学生がリストアップしておいた食材のメモを子どもたちに手渡し、自分たちで必要なものをそろえるように伝えた。女子が中心となって指示を出しながら買い物が進行し、必要なものを買い揃えることができた。バスは寺尾島までであり、そこからは徒歩でキャンプ場に向かった。13時頃に黒川キャンプ場に到着し、沢遊びをするなどゆっくりとした時間を過ごし、テントの設営および夕食の準備をしつつ、登山隊の到着を待った。なお、バックアップ隊として、鈴木克義先生、加藤寿子先生にご協力をいただき、円滑な運営をすることができた。また、英語英文科の学生2名が現地で合流し子どもたちにかかわった。

登山隊は、保育専攻科の学生1名と教員（筆者）が行動を共にして、登山中の安全管理を中心として、必要なサポートを行った。常葉短大入口バス停からバスに乗り、則沢で下車した。則沢の登山道は人の姿も少なく、沢の水を飲むなどさまざまな体験の機会があった。途中、子どもどうしのけんかが起こったが、学生が適切な言葉がけをしたことが奏功して、人間関係を崩すことなく登山を継続することができた。登山の序盤は歩き方のペースを調整することで特に問題なく歩みを進めることができたが、終盤の急登では子どもたちの体力差が目に見えて明らかとなり、ペースが落ちたり足の痛みを訴えたりする子どもが目立った。歩き始めからキャンプ場到着までの時間は、約8時間30分であった。



「登山道の様子」



「山頂」

キャンプ場では、テント泊と自炊による1泊2日のキャンプ生活を行った。夕食はカレーライスを中心とした献立、朝食は豚汁と卵焼きを中心とした献立であった。子どもたちは積極的に食事作りに取り組んでいた。特に夕食作りでは、大勢のスタッフ（子ども11名に対して学生5名、教員3名の計8名が対応した）のサポートがある中で食事作りをすることができ、子どもひとりひとりに対する目が行き届いていたこともあって、どの子どもも食事作りを存分に体験することができたように感じられた。

キャンプ最終日には、撤収を早めに終わらせ、川遊びの時間を十分に取れるようにした。そのため、早めに迎えに来た保護者の方には、川遊びをする子どもたちの様子を見ていただ

くことができた。「家族でもう一度来てみたい」という保護者の方の声も聞かれ、公開講座での体験が生活の中で発展していく可能性を感じた。



「おいしくできるかな」



「カレーライス作り」



「食事の準備」



「沢遊び」

3.4. 第4回「ふりかえりキャンプ～山頂から日の出を見よう～」

第4回のキャンプは、10月中旬に実施した。全てのキャンプの最終回であり、体験をふりかえることが主な目的であった。また、夏のキャンプの仲間と再会し共にテント泊やナイトハイクをすることで友との絆をさらに深めてほしい、山頂でみる日の出から「終わりではなくこれが始まり」のメッセージを受け取ってほしい、帰路ではキャンプの拠点であった瀬名を眼下に眺めることで地域への愛着を確認してほしいとの思いも込めて、テント泊とナイトハイキングを組み合わせたプログラムでの実施とした。

第3回のキャンプ同様に、1日目は各家庭で夕食と入浴を済ませた後19時に短大集合とした。まず、中庭にテントを張った。次に、和室にて写真のスライドショーを上映し、これまでのキャンプをふりかえった。続いて、登山の説明と持ち物の準備（装備と食材を分担する）をした後で、テントで宿泊した。

2日目は、午前3時半に起床し、温かい紅茶、パン、クラッカーの簡単な食事をとった後、4時半頃短大を出発した。ヘッドランプの明かりを頼りに、光鏡院横を通るルートで梶原山に入山した。瀬名地区や静岡市街の夜景や、既に冬の星座が輝く夜空を見ながらゆっくりとしたペースで登り、空も白み始める5時半頃、茶畑から急登に入り、ほぼ日の出時刻（5時54分）頃に山頂に到着した。地平近くの空に雲があったため、雲の上に太陽が姿を現したのは6時15分頃であった。子どもたちが分担して運びあげた材料でカうどんを作り、朝陽に照らされながらの朝食となった。帰り道は足取りも軽く、予定通り9時に短大にて解散した。

今回のキャンプも授業や実習と重なったが、部分的に協力してくれる学生が多く非常に助けられた。小1から小5まで体力差の大きい集団をうまく導くのは難しいのであるが、学生の適切な先導により、特に問題なく順調に登山が進行した。この学生は、すべてのキャンプに参加しており、キャンプカウンセラーとしての成長が感じられた。



「テントをたてよう」



「ナイトハイキング」



「日の出」



「朝食づくり」

4. 今後に向けて

4.1. 参加者募集について

今回の公開講座は、定員20名で開講したが、受付人数は15名、実際の申込人数は12名であった。参加者を確保できるように、広報の方法、受付期間、対象者の年齢層や地域などを検討していきたい。

4.2. 指導者（学生）の育成について

キャンプに関心があり、指導をしてみたいという学生は多い。しかし、特に保育科の2年生は授業や実習の合間を縫っての参加となり、可能な範囲というものがかなり限られてしまうという問題が生じた。キャンプの指導法というものは、自身が多様な野外活動を経験したり、実際に指導経験をしたりするなかで身につけていくものであるが、そのための時間が十分でないというのが現実であった。また、事前のミーティングに関しても、全員が揃うことはきわめて稀であった。キャンプのねらいやプログラムの進行について、事前に共有しておくことは必須であるが、限られた時間の中でそれを達成することは困難であった。今年度は初の試みであり、学生に十分なトレーニングの機会を提供することができなかったようにも思う。しかし、今回指導者として子どもたちにかかわってくれた学生たちは大変すぐれた資質を備えており、幾度も助けられたことに感謝している。

4.3. キャンプのプログラムについて

子どもたちからは既に「来年も参加したい」という声が聞かれ、キャンプへの期待がうかがわれる。今年度は初夏から秋にかけて実施したが、今後は年間を通じてキャンプのプログラムを提供することができればと思う。

5. おわりに

今回報告した公開講座「瀬名っ子しぜん探検隊」は、公開講座・地域支援プロジェクトの先生方ならびに多くの教職員の方々のご協力により実現することができた。また、子どもを送り出してくださった保護者の方や、実際の指導にあたった学生の協力により、実り豊かなキャンプになった。ここに感謝の意を表して、結びとしたい。